

中心市街地における夜間景観の特質に関する研究*

A Study on Characteristic of Landscape at Nighttime in Shopping Street*

園田史子**・三宅正弘***・齋藤庸太****

By Fumiko SONODA**・Masahiro MIYAKE***・Youta SAITOU****

1、はじめに

夜間における商業地域では、そこで暮らす人々の姿が景観を形成してきた。そのことは夜間における安全安心の環境の維持と無関係ではなかっただろう。ところが商業地における居住人口の減少によって、そうした夜間景観にも変化をもたらしている。個々の商店の更新時における建築形態においても、居住機能をもたない商業に特化したものとなってきた。そのことで、これまで維持されてきた環境が、近年の中心市街地においては監視カメラに依存するようになっていく。

商店街の活性化について多くの議論が行われている他方で、商店街における生活者が形成する景観という視点での研究は少ない。そこで本研究では、居住者の生活が垣間見られる商業店舗の窓などの開口部において、夜間にはそこから室内の光が野外を照らしているような、夜間における居住景観を分析していく。本論でいう居住景観とは、そこに住み暮らす人の姿を感じることのできる景観を指す。例としては、夜間時に居住者が行きかい交流している風景がみられる景観、または窓から生活の灯りがもれている景観などがそれにあたる。今回の分析では、主に後者の景観を対象とした。またそこには、店舗外観の生活窓の存在が夜間時に居住景観を形成しており、この生活窓などの店舗外観の分析も行う。そして、徳島市の中心市街地の10商店街における商業特性や居住率を分析し、それらと居住景観や夜間景観との関連を明らかにしていく。

*キーワード：景観、地域計画、市街地整備

**正会員、株式会社修成建設コンサルタント

(大阪府大阪市福島区吉野 1-10-13 N Tビル3階、
TEL06-6443-3324、FAX06-6443-3200)

***正会員、工博、武庫川女子大学生活環境学部生活環境
学科

(兵庫県西宮市池開町 6-46、
TEL0798-45-9882、FAX0798-45-9882)

****フリーランス

(〒649-6246 岩出市吉田 296-17
TEL 0736-61-6319)

既往研究として、地方都市中心部の住商混在地域の居住実態に関する研究¹⁾や、また商業地の街並み形成²⁾をあつかった研究がみられ、また夜間景観については、都市景観認識³⁾、夜景⁴⁾、車窓景観⁵⁾などの視点からの既往研究があるが、居住者が夜間にもたらし景観を対象にしたものはない。そして治安や防犯など計画学の視点から防犯環境設計についての研究⁶⁾も見られるが、居住景観から分析は少ない。

特に地方都市の中心市街地は、単に商業地的観点だけでなく、交通や居住地機能などを含めた複能的な視点での計画論が求められ、本論ではこれからの複能的市街地の景観像を検討するために、その第一段階として現状の居住景観の要素を考察していくことを目的にしている。

2、中心市街地の商業特性

本章では、業種を9種類に分け、地区ごとに業種構成調査を行い、地区ごとの商業特性を明らかにする。そこで得られた商業特性をタイプ分けする。

本調査では、対象地域を徳島県徳島市の旧徳島城下町である内町エリアの5地区(通町、中通町、新内町、南内町、両国本町)と、現在の徳島市の中心市街地における商業地域である新町エリアの5地区(西新町、東新町、銀座、籠屋町、富田町)の合計10地区とし、それぞれの地区における業種構成比率の調査を行った。各地域の店舗数は表1に示す。対象店舗は地域内のメインストリートに面した建物の一階部分にある店舗としており、専用住宅は含まない。

10地区はすべて旧城下町内の両側町となっており、多くの街区の背割りが路地になっている。しかし、戦災でほとんどの建造物が被災しており、歴史的な町割りは残るが、歴史的な町並みは残っていない。江戸期には、城側の内町エリアは御用商人地でもあったが武家屋敷も多く、他方で、内町から新町川で隔てられた新町エリアは、町人地が主体であり、近代以降も商業中心地として発展してきた。現在では東新町、西新町、籠屋町がアーケードをもつ。この東新町周辺が核となってきたが、近年はJR徳島駅前の百貨店などに商業の中心がシフトしている。



図1 本研究における調査対象地域

表1 各地域の店舗数

内町地区	店舗数	新町地区	店舗数
通町	27	西新町	12
中通町	18	東新町	49
新内町	13	銀座	24
南内町	34	籠屋町	32
両国本町	54	富田町	38

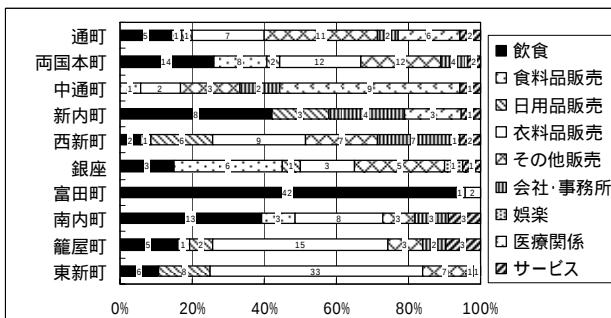


図2 地域別業種構成比率グラフ

図2に示した地域別業種構成比率調査の結果によって、各地区における商業特性を以下のようにわかる。

表2 各地区における商業特性

地区名	商業特性
通町・両国本町	多業種型
中通町	医療中心型
新内町	飲食業務型
西新町	物販業務型
銀座	物販中心型
南内町・富田町	飲食中心型
東新町・籠屋町	衣料品中心型

通町・両国本町にみられるような地区を多業種型、中通町にみられるように、医療関係施設の割合の高い地区を医療中心型、新内町にみられるような飲食店および会社・事務所の割合の高い地区を飲食業務型、西新町にみ

られるような物販系店舗および会社・事務所の割合の高い地区を物販業務型、銀座にみられるような物販系店舗が主体となっている地区を物販中心型、南内町・富田町にみられるような飲食店の割合の高い地区を飲食中心型、東新町・籠屋町は衣料品販売が多く、衣料品中心型となっている。

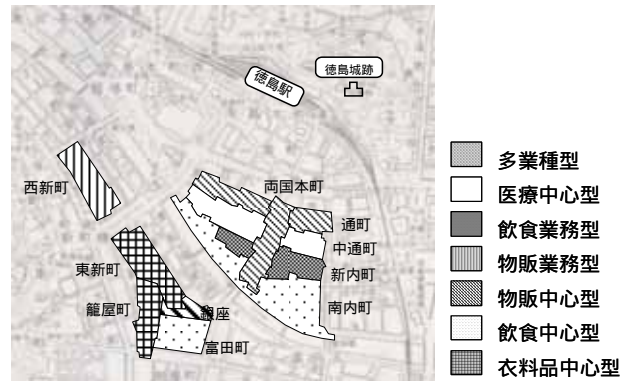


図3 地域の業種構成

3、中心市街地の居住特性

次に、各地域の商業店舗における居住実態についてまとめ、居住と店舗業種との関係を明らかにする。

本調査では、対象地域のメインストリート沿道にある商業店舗における居住の有無について地域の商店街会長および振興組合理事長、各店舗の店主にヒアリングを行ない調査した。ここでは、居住機能を持った商業店舗を居住型店舗とした。

地区別の店舗における居住率調査の結果を図4に示す。ここにおける居住率とは、各地区内店舗数における各地区内の居住型店舗数の割合である。

銀座で居住率が最も高く、約80%である。続いて西新町で約50%の居住率である。中通町と東新町では20%未満といった低い率を占めている。

また、業種別の居住率を図6に示す。ここでの居住率とは、各業種の店舗数における各業種の居住型店舗数の割合である。

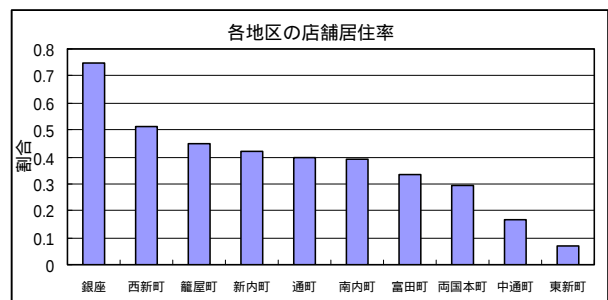


図4 地域別居住率

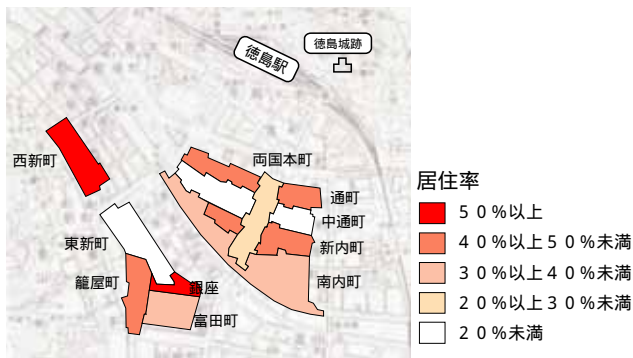


図5 地域の居住率

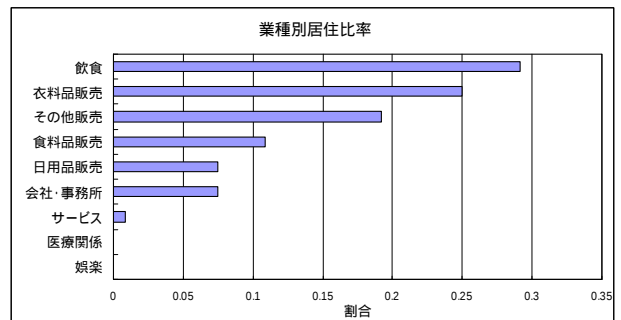
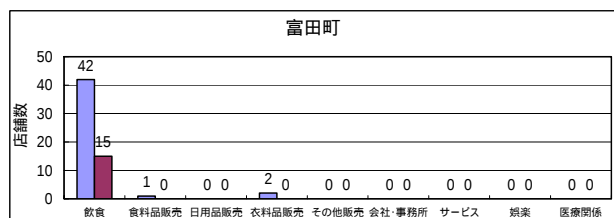
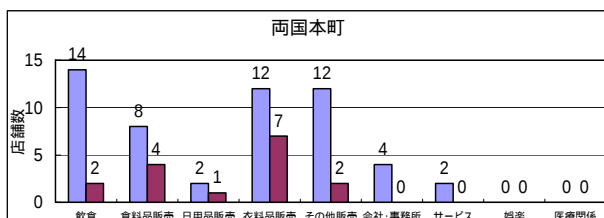
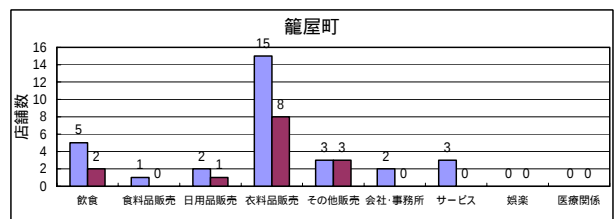
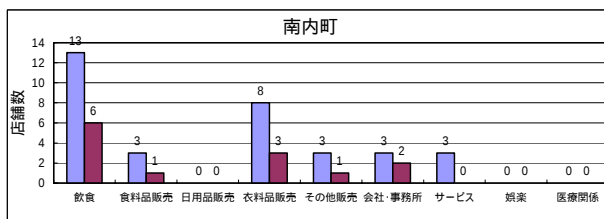
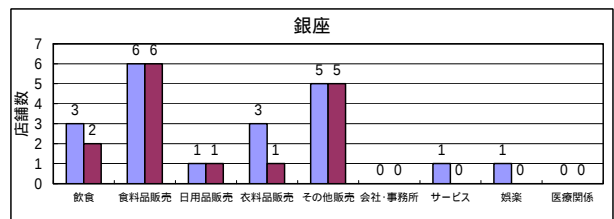
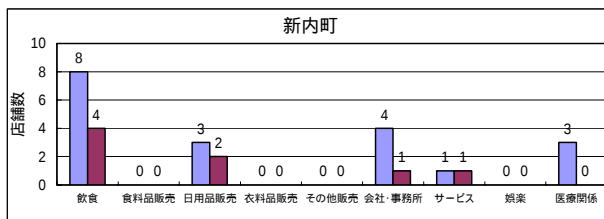
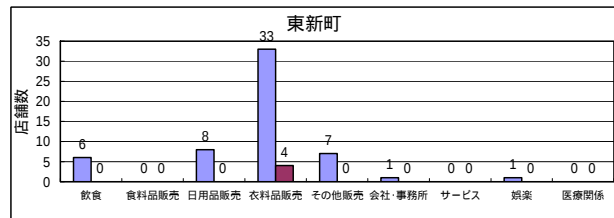
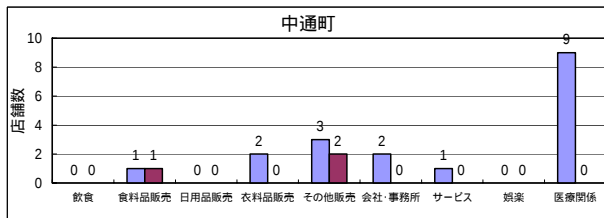
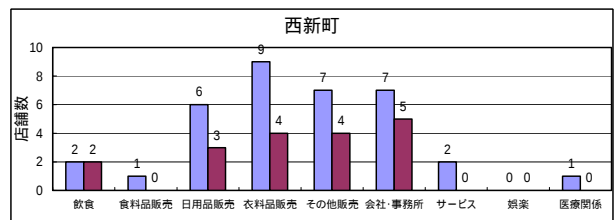
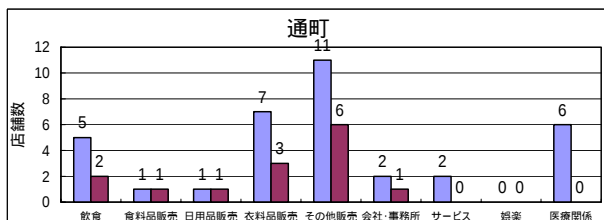


図6 業種別居住率



凡例 □ 全店舗 ■ 居住型店舗

図7 各地区の業種別居住型店舗数

業種別の居住率としては飲食で最も高く、約30%の飲食店舗に居住がみられる。続いて衣料品販売で25%、その他販売で約20%、食料品販売で約10%、日用品

販売と会社・事務所で約7%の居住率である。サービスや医療関係や娯楽などでは居住率はほぼ0%といった結果になった。

次に、各地区内においての業種別居住率の結果を分析する。図7において、各地区の業種別店舗数と業種別居住型店舗数を示す。通町、両国本町など業種が多様な地区、西新町、銀座など比較的業種の偏りが少ない地区において各地区の業種ごとの居住型店舗の割合をみると、他業種に比べて極端に居住率の高い業種、反対に極端に居住率の低い業種はみられず、業種による居住の偏りは少ないことがわかる。これらの各地区において、飲食、食料品販売、日用品販売、衣料品販売、その他販売で同程度の居住率がみられる。

全体の業種別居住率によると飲食店で最も居住率が高いという結果であるが、地区別に考察してみると、飲食店が他業種の店舗と比べて特に高い居住率ではない。一方、サービス、娯楽、医療関係については、どの地区においても居住率はほとんど見られない。

これらの分析結果から、業務（サービス、娯楽、医療関係）では居住は見られないということは地区に関わらず一定だが、物販に関しては居住率がその業種に左右されることはあまりないということがわかる。つまり、居住の有無は業種よりも地区特性により左右されると推測できる。

4、店舗外観の特性

本章では、各地域の商業店舗における外観特性についてまとめ、商業特性、居住特性との関係を分析する。

（1）店舗外観特性

店舗外観の生活窓の存在が夜間時に居住景観を形成しており、地域の夜間景観に影響するものと考えられる。また、シャッターは夜間においても閉鎖的な景観イメージを与えていると考えられる。そこで、本調査では、夜間時における店舗外観構造をシャッター型、ショーウィンドウ型、シャッター＋生活窓型、シャッター無＋生活窓型の4タイプに分け、地区ごとの商業店舗が創る景観との関係性について考察する。シャッター型やショーウィンドウ型では、景観として生活風景が見られないが、ショーウィンドウ型はシャッター型と比較すると透過性が高い。シャッター＋生活窓型やシャッター無＋生活窓型は生活風景が見られる。

対象地域にはアーケードのついている地域があるため、高さの基準を商店街のアーケードの高さ（建物の2階部まで）とし、アーケードの無い場合は2階部までを高さの基準とした上で、店舗外観を4タイプに分類した。

図9に店舗外観構造比率調査の結果を示す。生活窓は、商業的利用の場合以外の窓すべてを生活窓として調査した。倉庫や作業場などの窓も生活窓として含める。

この結果から、内町エリア（通町、中通町、新内町、

南内町、両国本町）の5地区においてシャッター＋生活窓型やシャッター無＋生活窓型の割合が高く、生活景の見える景観であるといえる。新町エリアの5地区（西新町、東新町、銀座、籠屋町、富田町）においては、シャッター型やショーウィンドウ型が多く見られ、夜間に居住景観が見られないといえる。

特に東新町や籠屋町で、シャッター型の比率が高い。



図8 店舗外観4タイプ

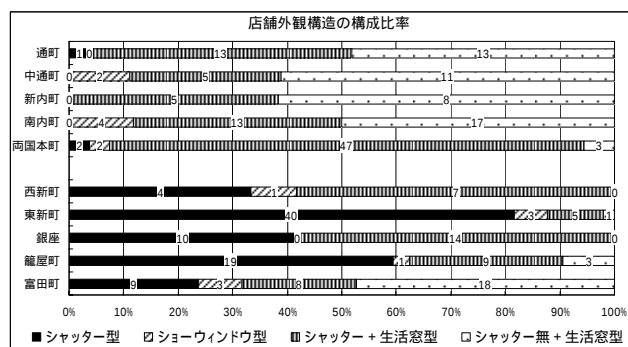


図9 店舗外観構造の構成比率

（2）店舗外観と商業構成との関係性

次に、店舗外観と、地域の商業構成との関係性を分析する。特徴として挙げられるのは、通町や両国本町といった多業種型の地区でシャッター＋生活窓、シャッター無＋生活窓といった外観構造の比率が高い。また、南内町や富田町といった飲食特化型の地域においても比較的生活窓が多く見られる。他方で、東新町や籠屋町などの衣料品特化型の地区では、シャッター型の外観構造の比率が高くなっている。

（3）店舗外観と居住特性との関係性

店舗外観と、地域の居住特性との関係性を分析する。居住率が低い東新町では、シャッター型の外観構造が主体となっている。しかし、西新町や銀座などの50%以

上の居住率の高い地域であっても内町地区などの他の地域に比べると、シャッター型が多く見られる。

居住率が低い地区ではシャッター型が多くなるが、居住率が高い地区においても必ずしも夜間に居住景観を見られるとは限らないことも明らかになった。

(4) アーケードとの関係性

アーケードの有無による店舗の外観特性を考察する。今回調査を行った10地区のうちの3地区（西新町、東新町、籠屋町）はアーケードをもつ地区となっている。

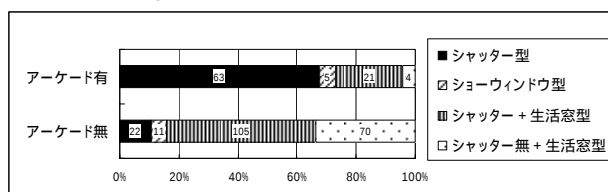


図10 アーケードの有無と店舗外観比率

アーケードを有する地区の店舗とアーケードを有さない地区の店舗において、外観構造の比率を示したグラフが図10である。この図からアーケードの無い地域ではアーケードの有る地域と比較して、シャッター + 生活窓型やシャッター無 + 生活窓型が多く、夜間に居住景観が見られることがわかる。アーケードの有る店舗では、70%近くがシャッター型の外観構造である。



写真1 籠屋町商店街

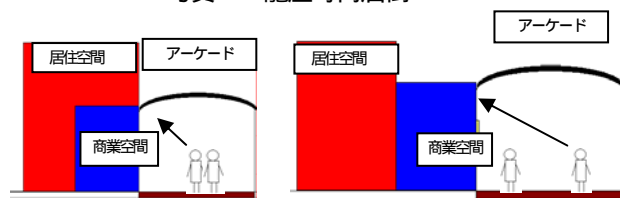


図11 アーケード街の居住型店舗の主な構造

籠屋町における居住率は高いものの、外観構造はシャッター型の占める割合が高く、夜間に居住景観が見られないという結果になっている。写真1のように、アーケードにより居住空間の景観を消していることにより、夜間においても居住景観は見られない。商店街の場合、ア

ーケードがあることで、アーケード内の通行人からは居住景観が見られず、また、居住者からはアーケード内が見えにくい状態になっている。

図11はアーケードのある商店街における居住型商業店舗の主な店舗構造を示した。アーケード内の多くの居住型商業店舗は、前面に商業空間を出し、その背後や上部に居住空間を形成している。アーケード内の通行人からは居住空間が見えにくい構造になっている。これは、籠屋町・東新町の店舗外観構成比率においてシャッター型店舗の割合が高い要因の一つと考えられ、また閉鎖的景観の形成要因とも考えられる。

アーケードのない地区の居住型商業店舗でも商業空間の背後や上部に居住空間を形成しているといった作りはアーケード街と同様であるが、図10の結果からわかるように、生活窓のある部分が完全に隠されるようにはなっていない。

5、夜間における居住景観

本研究で用いている居住景観とは、そこに住み暮らす人の姿を感じることでできる景観を指す。例としては、夜間時に居住者が行き来している風景がみられる景観、または窓から生活の灯りがもれている景観などがそれにあたる。

今回は生活の灯りを居住景観として調査をおこなった。生活窓があったとしても、留守や雨戸の利用などにより灯りが見られない場合は、「灯りは見られない」としている。写真のように店舗の二階以上で、商業機能以外の明かりが見られるかどうかを調査した。調査日は、2006年の2月17日に行い、調査は、10時45分から11時15分の間、3名の調査員の目視により明かりの有無を確認した。



写真2 生活の灯り1



写真3 生活の灯り2

調査結果から、地図上に灯りが見られた場所をプロットした。（図12）

（灯りの見られる店舗数）/（店舗数）で表すと、西新町では4/12で最もその比率は高く、33%である。通

町6/27、新内町3/13であり、20%以上である。籠屋町6/32、富田町4/38、南内町6/34で10%以上である。銀座2/24、両国本町2/54で低い比率である。東新町0/49、中通町0/18であり、生活の灯りは見られなかった。

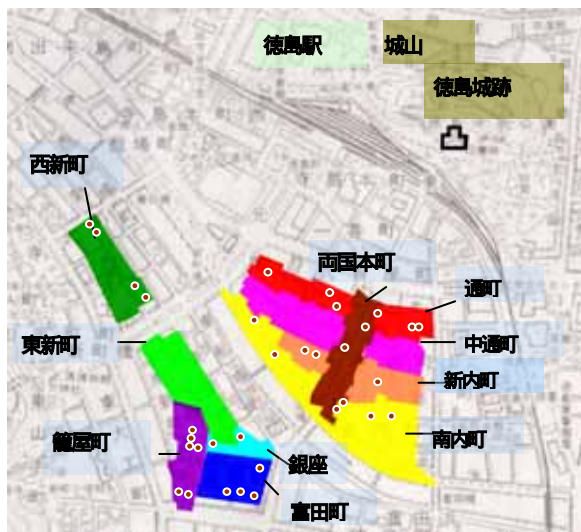


図12 夜間時の居住景観

居住率の高い西新町、籠屋町や、通町、新内町、南内町で、生活の灯りが見られる。東新町や中通町などの低い居住率の地域は、夜間における居住景観である生活の灯りが見られない。

このように灯りの有無は居住率に大きく関係しているが、居住型店舗数と比較してみても居住数の大部分で必ずしも居住景観が見られる。

6. まとめ

本調査では、徳島市中心市街地の10地区において、各地域の商業特性、居住特性、外観特性の実態を調査し、以下の点を明らかにした。

- 1) 業種別に居住率をみると、飲食店で最も高く、約30%である。一方、サービスや医療関係や娯楽などの業種では居住率はほぼ0%となっている。
- 2) 多業種型、飲食中心型の地区で生活窓のある外観が多く、衣料品中心型の地区ではシャッター型の外観が多く生活窓はほとんどみられない。
- 3) 居住率の低い地区では、シャッター型の外観が多い。しかし、50%以上の高い居住率の地域でもシャッター型が多く見られる。
- 4) アーケードを有する地区とアーケードを有さない地区を比較すると、アーケード無の地区でシャッター型店舗の割合が高い。

また、飲食店で居住率が高くなるなど、業種による居住傾向がみられた。また、居住率の高い地域においても、

シャッター型外観構造も多く、居住景観である生活の灯りがみられない地域もある。

今度の課題・展望としては、本論で明らかになった夜間の居住景観の要素をもとに、これからの複能的市街地の景観像とともに設計指針の検討を行っていきたい。

従来の中心商業地において検討されてきた商業機能主体の方向性では、居住機能が弱まると同時に、商店の撤退によって、居住と商業の両機能が低下することも考えられる。本論で得られたアーケードにシャッターという組み合わせ事例では、商店撤退によって、シャッターが常時閉められ閉鎖的な景観が定着している。商業衰退地域では、適切に居住地へシフトさせる方策が考えられるだろう。また近年、中心市街地にマンション建設が増加しており、こうした建築設計と、商店街や商業店舗とが連携していくことで、それらの連続的なデザインを考えていくことも必要になってくるだろう。新たな夜間人口の増加や夜間景観の創造していくことで、その延長線上に、人が集まり結果的に商業が形成されることが考えられる。

参考文献

- 1) 井川進、樋口秀：地方都市中心部の市街地変容と居住継承に関する研究 ―長岡市におけるケーススタディー―、2002年度第37回日本都市計画学会学術研究論文集、pp589～594、2002。
- 2) 浜田恵三、杉山茂一、赤崎弘平、徳尾野徹：都市商業地におけるセットバック空間の活用状況 ―私有地の社会的利用による商環境整備―、日本建築学会計画系論文集 第602号、pp129～135、2006。
- 3) 樋口忠彦、玉川英則、明間寛治：都市景観の識別度に関する昼と夜の比較研究、日本建築学会計画系論文集 第388号、pp79～85、1988。
- 4) 乙部暢宏、鍵野壮宏、後藤春彦、李永桓、李章浩：都市における俯瞰夜景の景観認識に関する基礎的研究 ―東京都心を対象として―、日本建築学会計画系論文集 第606号、pp107～114、2006。
- 5) 李永桓、後藤春彦：車窓シークエンス景観の夜間注視特性に関する研究 ―アイマークレコーダを用いた東京都ゆりかもめ沿線地域の昼・夜間景観の比較―、日本建築学会計画系論文集 第606号、pp143～150、2007。
- 6) 木梨真知子、金利昭：防犯環境設計における路上犯罪の抑止要因に関する研究―文献レビュー研究を通して―、2002年度第37回日本都市計画学会学術研究論文集、pp667～672、2002。

中心市街地における夜間景観の特質に関する研究*

園田史子**・三宅正弘***・齋藤庸太****

中心市街地においては夜間人口の減少により、夜間においてこれまで形成された居住景観の変化が著しくなっている。特に商店街では、監視カメラなどの設置が増加し、これまでの居住景観を補完するようになっている。そこで、本研究では、現在の中心市街地における居住実態を明らかにするとともに、それがもたらす夜間景観の特質を示す。対象地域としては、徳島市中心市街地の10地区を比較考察した。

A Study on Characteristic of Landscape at Nighttime in Shopping Street*

By Fumiko SONODA**・Masahiro MIYAKE***・Youta SAITOU****

In the downtown, the change in the residence landscape that has been formed up to now at nighttime is remarkable because of a decrease in the dormitory population. Especially, the installation such as surveillance cameras increases, and a current residence landscape is supplemented in the shopping street. Then, the residence realities in a present downtown are clarified, and the characteristic of the landscape at nighttime that it brings is shown in this research. Ten districts of the Tokushima City downtown were comparing considered as an object region.
